

コリント人への手紙第一14章33節 「混乱ではなく、平和の神」

1A 聖徒たちの全ての教会

1B 礼拝における秩序

2B コリントの教会における混乱

2A 混乱の神ではない方

1B 秩序のある被造物

1C 天地創造

2C 制度

2B 天における秩序

3B 混乱を引き起こす私たち

4B 秩序を回復させる神

3A 平和の神

1B 戦いを挑む人間

2B 平和の君

3B 人の明け渡し

4B 思いを超える平安

本文

コリント人への手紙第一 14 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、コリント第一の 13 章まで来ました。午後に、14 章を一節ずつ見ていきますが、今朝は 33 節に注目します。「**神は混乱の神ではなく、平和の神なのです。聖徒たちのすべての教会で行われているように、**」

コリントの教会の人びとは、「すべてのことは許されている」という考えをモットーにして、自由に個々人が願っていることをすることを大事にしていました。現代社会と、とても似ていますね。「自分の信じていること、願っていることをやっていけばいいのだよ。」ということを行います。そして、それぞれが違うのだから、多様性を大切に、一人ひとりの個性が花咲く社会が素晴らしいと、ほめたたえるのです。それは、一見、素晴らしいもののように見えます。けれども、その理想とは正反対のことが起こるのが現実です。

コリントの教会では、様々な問題が起こり、その一つが混乱と無秩序でした。主の晩餐では、我先に食事をして、貧しい人たちが恥ずかしい思いをしました。主のからだをわきまえないで食べたので、病気になったり、死んだ人さえいました。そして、当時は、女性は公の場所では被り物をしていたのに、コリントの女性たちは礼拝で被り物を取りました。被り物をしていない女性は、売春婦のように見られていたのにもかかわらず、です。そして 14 章には、みなが全体のことをわきまえない

いで、同時にいろいろな人が異言で語り、騒がしい音が響いているだけの集会になっていました。

ところで、私の家にはテレビがなく、大晦日には NHK の紅白歌合戦を見ないで、何年も経っています。けれども、話題になるニュースで、その時に注目を集めた歌については知っています。昨年末の番組では、興味深い歌がニュースになりました。「命に嫌われている」という刺激的な歌です。これは、要は、自殺願望のある、思春期にいる子たちの混乱を代弁しているかのような歌です。私自身が、高校生の時に抑うつのような症状で悩み、死にたいという思いも何度となくよぎっていましたので、その時のことを思い出しました。そして、そういったところから、いかに、死んでよみがえったキリストによって自由にされたかの証しを、ロゴス・ミニストリーのブログに書き残しました。¹

思い出すと、同じ NHK の紅白歌合戦で 2005 年に歌われたのが、SMAP の「世界に一つだけの花」で、これが話題になりましたね。まさに、現代社会の世情を反映したような内容です。「No.1 にならなくてもいい。もともと特別な Only one」という始まりで、花屋の花が一つ一つ違うから、「世界に一つだけの花。その花を咲かせることだけに一生懸命になればいい」というものです。一見、良さそうに見えるのですが、問題は「その花を咲かせる」といっても、その花がどのようになっているのか分からないのです。自分のうちにある花とは何か？それが分からずに、混沌として、悩み苦しんでしまうのです。それで、「命に嫌われて」しまうのです。

花を咲かせるといっても、その源泉となっている命が分からないのです。その命が、神のものであって、神につながり、神に従っているところに、初めて「世界の一つだけの花」になるのです。そこで今朝の御言葉、「神は混乱の神ではなく、平和の神なのです。」につながります。神こそが、あらゆる美しい服よりも、さらにすばらしい美しさで花を着飾ってくださっています。そこにある美、また秩序と言ったらよいでしょうか、その秩序があって私たちは初めて安らぎを得ます。平安が与えられます。大事なのは、花を咲かせることではなく、花を美しく着飾ってくださる神に従うこと、その秩序の中に生きることです。

1A 聖徒たちの全ての教会

パウロは、混乱の神ではなく、平和の神なのだ、と、混乱しているコリントの教会に対して書いた後に、「**聖徒たちのすべての教会で行われているように**」と次に書いています。イエス・キリストの教会であれば、そして当時のローマ社会に生きている人々が集まる教会であれば、どこにおいても同じような秩序が見られます、ということをお話しています。以前、女が被り物をしていなかったことをパウロは指摘しましたが、すべての教会では、被り物をしていたんですね、当時。というか、当時のローマ社会では、公の場に出る時は、女は被り物をしていたのです。礼拝において、秩序があることを示唆している言葉です。

¹ <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=9388>

1B 礼拝における秩序

聖書には、明確に、細部にわたって、礼拝を献げるにあたっての具体的な指針はありません。讚美歌は何曲歌えばよいのだろうか？とか、楽器はギターの方がよいのか、ピアノの方がよいのか？いや、アカペラにすべきなのか？とか特にありません。ですから、教会の礼拝は、世界の中で、歴史の中で本当に多様です。聖霊の導きですとあって、しばらくの間、それぞれが手を挙げて、長いこと祈りや賛美をさせている教会もあります。また、賛美だけでなく、祈りもすべて祈禱書になっていて、初めから終わりまで、儀式の中で、順序正しく行っている教会もあります。私は、トルコ旅行に行った時に、イスタンブールにある、正教会の本拠地のようになっている、聖ゲオルギオス大聖堂を訪問しました。そこで、延々と司祭の方々が祈禱を行っています。おそらく何時間も、このようなことをしているのだと思いますが、ひたすら祈禱書を読んでいるんですね。これほどの違いがあるのは、聖書自体がそれほど具体的に、こうこうしなさいという指示を与えていないからです。

しかし、礼拝の秩序や順序を教えていないということでは決してありません。賛美を献げることに、こう教えています。「エペ 5:19 詩と賛美と霊の歌をもって互いに語り合い、主に向かって心から賛美し、歌いなさい。」そして、生まれたばかりの教会において、次の活動が行われていました。「使 2:42 彼らはいつも、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしていた。」使徒たちの教えを堅く守ります。交わりを持ちます。パン、主の聖餐にあずかり、祈りを献げます。そして牧者であるテモテに対して、パウロが命じます。「I テモ 4:13 私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えに専念しなさい。」聖書の朗読、勧め、教えにかなりの時間が割かれていたことがわかります。そして、秩序を整えることについても教えています。「I テモ 3:15 たとえ遅くなった場合でも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたに知っておいてもらうためです。」

2B コリントの教会における混乱

このように、細部における指示はなくとも、明らかに教会には秩序があることを聖書は教えています。それに対して、コリントの教会は、秩序を失っていました。14 章では、先に申し上げたように、誰かが異言を語っても、他の誰かが異言を語り始めています。けれども、黙っている人々には、その語っていることが何かが分かりません。解き明かしがないのです。そして、だれもが、それぞれ自分の欲するままに、啓示を告げ、賛美し、教えたりしていたようです。そこに順番がありません。主の晩餐で起こっていた「我先に」が、こういった御霊の賜物を用いる時にも起こっていたようです。それから、礼拝は、ユダヤ教のそれにならって、教会でも男女が別に座っていましたが、奥さんが自分の夫に、話しかけて、「これって、どういう意味なの？」と声をかけていることも、しばしばあったようです。「すべてのことが許されている」といっても、パウロが言いましたね、「すべてのことが益になるわけではない」のです。

2A 混乱の神ではない方

「神は混乱の神ではなく」秩序の神です。

1B 秩序のある被造物

1C 天地創造

私たちは、天地創造において、どれほど秩序あるものかを、驚いていると思います。いつも、同じような時間に日が上り、日が沈みます。太陽、月、星が規則正しく運行しています。自然は、循環しています。水は空で雲となり、そこから雨となり、川となり、海に流れて、再び水蒸気で空に戻ります。海岸線は、ほとんど変わることなく、あれだけ波を打っているのに変わりません。植物や動物の世界も見事な秩序があります。そして、人間が住んでいて、秩序を保ちつつ生きています。

創世記 1 章は、神が天地を造られたという真理を教えているだけでなく、秩序をもって造られたことを教えています。造られた、という言葉だけでなく、分けられた、という言葉も多くあるのです。「神は光と闇を分けられた」「神は、..大空の下にある水と大空の上にある水を分けられた。」そして、生き物については「種類ごとに」という言葉が何度も出てきます。「創 1:12 地は植物を、すなわち、種のできる草を種類ごとに、また種の入った実を結ぶ木を種類ごとに生じさせた。神はそれを良しと見られた。」

2C 制度

そして、人を神が造られた時に、男と女に造られました。そして、制度を立てられました。その始めが結婚です。「2:24 それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」そして、ノアの時代に洪水が起こり、その後には神は、人を殺す者を殺すことを、人にお任せになりました。「9:6 人の血を流す者は、人によって血を流される。神は人を神のかたちとして造ったからである。」これは、公権力を意味しています。政府と言ってよいでしょう。パウロは、何度となく、男と女の間にある秩序について教えました。この創造の順序から教えたのです。女が、男の助けのために男から造られた、ということから教えています。そして、政府については、すべての権威は神から来ているので、従いなさいと教えています。

ですから、今の流行りになっていることは気を付けないといけません。そうした区別や違いを、差別と言い換えて、家族や性別、また国という単位を壊そうとする動きがあります。いかにも、多様性の社会とかいって、良さそうに聞こえますが、女性を女性、男性を男性と呼んただけで、あなたは差別的だという空気が立ち込めています。その行き着く先は、混乱です。秩序の崩壊です。結局、私たち人間が自分たちを痛めつけ、苦しめていきます。

2B 天における秩序

このように、地上において、神の立てた秩序があります。そして、それ以上に、天においてはしっかりとした秩序があります。聖書の神が、「万軍の主」と呼ばれることが多いですね。なぜか？それは、天の軍勢がいるからです。天においては、その指令系統が、軍隊のようにしっかりとしているからです。私たちは今、平日の学びでダニエル書を学んでいます。10 章で、ミカエルのことが

「最高位の君の一人」と呼ばれています(13 節)。最高位とありますから、位があるのです。軍隊という組織において明確な位があるように、天において位がしっかりとしています。

黙示録 4 章には、ヨハネが天に引き上げられて、そこにおける礼拝の姿を見ました。そこには御座がありました。神の御座です。その周りには、二十四の座がありました。長老たちが座っています。そして、御座のあたりには、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がありました。その姿は、エゼキエル書 1 章に出てくるケルビムと同じ姿です。そして、これら四つの生き物が礼拝を献げる中で、長老二十四人が応答する姿が描かれています。「4:9-10 また、これらの生き物が栄光と誉れと感謝を、御座に着いて世々限りなく生きておられる方にささげるとき、10 二十四人の長老たちは、御座に着いておられる方の前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方を礼拝した。また、自分たちの冠を御座の前に投げ出して言った。」天における礼拝では、このように明確な秩序があるということです。

3B 混乱を引き起こす私たち

ですから、私たちは地上で、真理と御霊によって礼拝を献げています。天使も見ている中で、礼拝を献げています。天にあるものが、教会でキリストにあってつながっているのです。ですから、なおさらのこと、礼拝には秩序があります。「自分の感じたまま、自分のやり方で自由に礼拝します」ということで礼拝を献げるならば、どれほど天にあるものを損ねているかお分かりになるでしょう。神は、混乱の神ではないのです。

しかし、秩序や権威というものに、抵抗がある方がおられるかもしれません。そういった存在によって、自分が虐げられたり、抑圧されたことがあるからです。けれども、それは権威の与えられた人々が、例えば親という存在が、自分たちの上に権威がある、神がおられることを覚えなくて、自分も権威の下にいることを知らなかった、認めなかったからです。権威そのものが悪いものではありません。いや、神は、例えば親であれば、「父と母を敬いなさい」と命じておられるように、その権威は神から来ているのです。

真の権威があることによって、人の心は安心します。自分がその権威の下にいることによって、守られているという安心感があるからです。そして、その中で自分は建て上げられる、育てられることを知っています。私たちが宣教地にいた時に、ある抑圧的な国から逃げてきた女の子を養子にした宣教師の人がいました。その子は、自分の年よりも低い学年から学校に入りましたが、それでも基本的な学習ができない状態でした。どんなに工夫しても、能力が向上しなかったのです。確か、まともに話すこともできなかったと思います。しかし、何年か経って、今までのことが嘘だったように、一気に学力が伸びたのです。それは何だったのか？学習能力が劣っているとかそういうものではなく、その子が養子に取られたその宣教師夫婦を、親としてようやくみなすことができたからだと思います。親がいるのだ、という安心感があり、その安心があるので、愛によって育てられ

ていくのです。権威のあるところに平和があるのです。

4B 秩序を回復させる神

もしかしたら、今、ご自身が混乱の中におられるかもしれません。今、一体どういうことなのか分らずにおられるかもしれません。そこで、強くお勧めしたいのは、神のところに来ることです。神は、混乱の神ではなく、秩序の神です。神は天地創造の時に、こんな働きをされました。「創1:2-3 地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあり、神の霊がその水の面を動いていた。3 神は仰せられた。「光、あれ。」すると光があった。」茫漠としていた時、そこから神は「光よあれ」と言われました。茫漠としていたところから、形ある創造、秩序ある創造が生まれました。このようにして、神は私たちに、キリストにお任せすることによって秩序を回復されます。あなたの道をまっすぐにご覧ください(箴言 3:5-6)。

3A 平和の神

そして、「**平和の神なのです。**」とパウロは言います。

1B 戦いを挑む人間

自分の願うように、自分の欲するようになるとなぜ混乱が起こるのか？それは、根底に人が願っていることが、神とその秩序に反抗しているからです。神に対して戦いを挑んでいるのです。「ヤコブ 4:1 あなたがたの間の戦いや争いは、どこから出て来るのでしょうか。ここから、すなわち、あなたがたのからだの中で戦う欲望から出て来るのではありませんか。」アダムが、神に、善悪の知識の木から実を取って食べてはならないと命じられたのに、食べました。神がそう言われたのですから、そのまま従えばよいのですが、そうしなかったのです。この時点で、神に敵対する者となったのです。パウロは、その人間のありのままの姿、肉は神に敵対していることを話しています。「ロマ 8:7 なぜなら、肉の思いは神に敵対するからです。それは神の律法に従いません。いや、従うことができないのです。」これが、自分の願うように物事を進める時に、必ずや至る結果です。争いが起こり、内には混乱が起こります。自分で自分が何をしているか分からない状況に陥るのです。

そして、神に対して反抗するだけでなく、人々の間でも争いを引き起こしてしまいます。争いが無いのに争いを引き起こすのです。「箴 3:29-30 隣人が、あなたのそばで安心して住んでいるとき、その人に悪を企むな。30 あなたに悪い仕打ちをしていないのなら、理由もなく人と争うな。」

2B 平和の君

聖書では、神とキリストが紹介される時に、そこに平和があることを教えています。キリストが世に現れる預言に、「平和の君」とこの方が呼ばれています(イザヤ 9:6)。新約聖書には、新改訳2017 には、「平和の神」という言葉が 7 回出てきます。神の権威の下にいれば、そこには平和があるのです。神が平和の神だからです。

3B 人の明け渡し

そこで人は、何をすればよいのでしょうか？どんなに自分の願いと異なっても、自分の感情が付いてこなくとも、主にすべて明け渡しということです。それは、自分を押し殺すことではありません。抑圧することではありません。むしろ平和への道なのです。「イザ 26:3 志の堅固な者を、あなたは全き平安のうちに守られます。その人があなたに信頼しているからです。」主を信頼して、この方に自分を明け渡し志を持つ時に、主が全き平安の内に守ってくださいます。

4B 思いを超える平安

主に自分を明け渡しことによって、神と平和があります。自分の欲によって神に争うことがなくなります。そうすると、平和の神は、ご自身の平安で私たちに満たして下さいます。日本語には、平和という言葉と平安という言葉がありますね。これはとてもいいです。神との平和があれば、神の平安が私たちに満たします。「ピリ 4:6-7 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。7 そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」

コリントの教会にある課題は、霊的な成長ということです。霊的な幼さの特徴は、妬みや争いでした。パウロは彼らを、「キリストにある幼子」と呼びましたが、なぜなら、「あなたがたは、まだ肉の人だからです。あなたがたの間にはねたみや争いがあるのですから、・・」ということです(3:1,3)。結局、霊的に成長するとはどういうことか？と言いますと、神の平安をどれだけ知っているか？と言ひ換えられるかもしれません。神にすべてを任せることができている信仰です。その信仰が増してくると、自分のことを求めることが自ずと減ります。視野が自分のことを超えて、教会の益になること、他の人びとの益になることを考えます。何よりも、イエス様の目を持つことができるようになります。主が見ているように自分も見えていく。自分がイエス様を信頼していることで、他の人々が主のご臨在を知って、他の人々も主により頼んでいくようになります。